

【特集】音楽が結ぶ人の心、人の力

われわれ人間は、太古の昔から音楽とともに生きてきた。困難なときには励まされ、時に懐かしい記憶も呼び起こす。阪神・淡路大震災や東日本大震災においては、祈りと鎮魂の音楽が人々の支えになった。音楽は、奏でる人、聴く人の心映えや生き様が反映されるからこそ、心を癒す以上に深く人の心に届き、動かす。本特集では、音楽を通して大切な人に伝えられること、社会に対してできることについて、あらためて考える。



撮影：大杉隼平

音楽が身近にある環境で幼少時からジャズを独学し、早くからジャズピアニストとして偉才を発揮してきた小曽根真さん。ビッグバンド、作曲、クラシックなど活動領域も幅広く、しばしば「日本人初」を冠され、国境を超えて多彩に活躍している。そのかたわら、ホスピスでの演奏活動や、阪神・淡路大震災での被災経験から、東日本大震災の支援活動にも取り組んできた。音楽を通して人々に伝えたい思い、音楽が結ぶ人の心、力について聞いた。

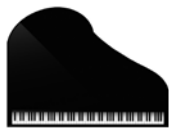
生きててよかった—ホスピスで知った音楽が存在する意味

—お義母様の入っておられたホスピスで、毎月演奏をされていたそうですね。

小曽根 今は残念ながら毎月は行けないのですが、義理の母が本当にお世話になった、とてもいい病院です。ホスピスのラウンジにスタインウェイのピアノが置いてあるだけで、豊かな気持ちになりました。

初めて行った時、母は病院の3階の集中治療室で寝たぎりでした。7階のホスピスのラウンジで何とか母にピアノを聴かせられないかと頼むと、「いいですよ」とベッドごと運んでくれました。普通そんなことしてくれませんか。看護師さんは最初もちろん僕のことをご存知なくて、「他のホスピスの患者さんもあるしければどうぞ」と言うと、「大きな音を出すといけないので蓋を開けないで演奏してください」「もちろんです、20〜30分だけ弾きます」と。ダニーボーイを聴きたいとか、若い頃に聴いた曲を、というり

「生きているだけですばらしい」 と音楽で伝えたい



ジャズピアニスト 小曾根 真 氏

クエストを僕が全部弾いたら、皆さん涙を流していて、また来月もやらせていただきます、とホスピスに通うようになりました。

翌月戻ると、ラウンジのソファーに名札が貼ってある。前にいらした方たちが予約しているんです。

あんなに僕の一言一音を、渴いた砂漠に水が一滴浸み込んでいくような聴き方をしてくれるお客さんは、それまでいませんでした。「すべての音をもつて天国に行くぞ」というくらいの勢いで聴いてくださって、演奏者冥利に尽きるというか。音楽の存在する意味はこういうことなんやなと、もう本当にありがたくて涙が出てきました。でも、「また来るからね！」と別れて、次の時にはもういらつしやらない方もいて、「小曾根さん、あの方はもう逝きはったんですよ」と言われることもありました。

人生の残りの時間を過ごすホスピスには、大きく3つのステージがあると聞きました。最初に「葛藤」があつて、それを乗り越えると、他者に対しての「謝罪」に移り、その

後に「感謝」に移行する。なぜ自分は死なないといけないのか、なぜ私なのかという葛藤の段階から謝罪の段階に行くには、ものすごいエネルギーがいるそうですが、音楽があるとその移行が早いんだそうです。

―なるほど、それは興味深いですね。

小曾根 家内（女優の神野三鈴さん）の友だちの大竹しのぶさんが東京から来てくださったこともありました。「こんにちは〜」としのぶさんが出てきて、患者さんがワーツと成って、「生きててよかった〜」って、おじいちゃんもおばあちゃんもみんな言うんですよ。そんなことにも感じるものがあつて、毎月行くようになりました。

―それまでの観客とは全然違うやり取りがあつたんですね。音楽家として何か変わりましたか？

小曾根 教えていただいたんですよ。ね、音楽のそもその存在理由を。「音楽とか芸術があるってこういう

ことなんや」と浮き彫りになってきました。

そもそもなぜ音楽があるのか、なぜ人間は絵画、彫刻、音楽、文章、芝居という芸術を与えられたのか。

人間が生み出す芸術は、決して崇高なものでも神格化されるものでもなく、日常生活のなかで一番近いところにあるべきものなんだ、これがなると人間は生きていけないんだと感じました。物はあつても心は生きていけないし、心が生きていけないと、今、世の中でいるんなことが起きているように、最終的には殺し合いになつてしまふ。

音楽は、人間が神様からいただいた「人間と人間が心に栄養を与え合う力」だと思えます。どっちが与えるということではなく、聴く人間も、弾く人間も、いただく。その媒体として音楽や絵、芸術が存在するということですね。

―特にジャズは、演奏者同士も、与え合い心を通わせますね。

小曾根 そうなんです。ジャズは即興でつくりまますからね。一期一会な

ので、一度しかないその瞬間を皆さんとシェアする。本当にすばらしい音楽です。

「感動できる感性」は 唯一人間だけが持つ宝物

— ガーシュインの「ラプソディ・イン・ブルー」なんかも、人と人との心の絡みが伝わってきて最高ですね。

小曽根 100年前にあれをガーシュインがやっていたわけですからね。僕らが「何かをしたい」と思っているからです。ガーシュインもおそらく、NYのまちなかを歩いていて、どこかのバーで黒人が演奏するジャズを聴いて、こんなすばらしい音楽があるんだと感動したんだと思うんです。当時は都会のNYといえども、奴隷制度こそないけれど、まだ黒人が差別される時代。ジャズを「黒人の音楽」くらいに思っている上流階級の人たちに、ど

うやってそのすばらしさをわからせようかと「ラプソディ・イン・ブルー」や「八調の協奏曲」などを書いて、彼らに聴かせたわけです。それは、ガーシュイン自身がジャズに感動していたということにほかならないですね。

— すべては感動から始まる、その感動を音楽で伝えて、また感動がうまれてという、その循環なんですね。

小曽根 「感動できる感性」は、唯一人間だけが持っている宝物です。お客さんが「今日のコンサートはすばらしかった!」とサイン会などで目を輝かせて言ってくださるんです。が、そっくりそのままお客さんにお返しします。発信しても受信機がないと感動は生まれません。お客さんの受信機の感度がいいから感動する。感動するエネルギーがお客さんから僕らにも返ってきて、次に向かっていくエネルギーになります。お客さんの感性がアーティストを育てるん

です。

日常の音が戻って来たときの 幸せを忘れない

— 小曽根さんは東日本大震災の支援活動もされていますね。阪神・淡路大震災でのご体験も大きいのでしょうか。

小曽根 東北の皆さんがどう思うか、僕も阪神・淡路大震災を体験したのによくわかります。震災が起きた直後より2年後くらいが大変だということも、その頃に地獄を見ている人が神戸でたくさんいたのでわかっていました。阪神・淡路は、直後に地下鉄サリン事件が起きて、多くのマスコミヤや人々の関心も話題もサリンに移ってしまいました。だから東北の人には「忘れないよ、またちゃんと帰ってくるよ」と伝えることと、「2年後が肝心」というのが僕の方では大きなテーマでした。

仮設住宅に入ってからが辛いんです。家はなくなっても借金は残って、でも仕事はなくてどうするの。自分の土地を持っていなければならない。借地にローンで家を建てている人もいっぱいでしょう。東北でいえば、60歳前後で新しい船を買って借金が残っているのに、船を失った、でも新しい船買えないという人はどうするんだろうと。そういうことに対して行政が何もできなくて、憤りを感じている人もいっぱいいると思うんです。でも、行政が全部やるのも無理だし、批判してもしょうがない。

そんな状況のなかでも、「生きてよかった」と音楽を感じてもらったことだけでも、何かお役に立てないかというのがありました。亡くなられた方を想う心の傷もありますが、「これから先どうしていいか」というところを考えないといけないと思いました。神戸でもそれが大きな焦点でしたから。



宮城県気仙沼市の「お魚いちば」でのステージ



岩手県大槌町の蓬菜島（ひよっこりひょうたん島）をバックに演奏

「まず、がんばろうという気持ちにまで、心を持っていってもらえないかと。」

小曾根 そうなんです。「生きてたら、ええことあるやん」というところですね。震災から2年後の2013年の7月に、ビッグバンド「No Name Horses」で東北支援キャラバンツアーに行きました。日産自動車に支援いただいて、横がバンと開くとそれがステージになる1トントラックとバス1台に機材

を全部積み、メンバー全員が乗って。楽器はヤマハから提供いただき、照明も音響、ステージスタッフと、いつもコンサートと一緒にやっている全員がボランティアで参加してくれて、2日間で6カ所を演奏してまわりました。初めてジャズを聴く人もいて、「また来てね」と言われました。

神戸の震災のことで僕が一番覚えてるのは、JRが繋がった時のことなんです。住吉駅までしか行けていなかった快速電車が繋がっ

たときに、尼崎を出た新快速の車掌さんが「次は三ノ宮」とアナウンスするのを聞いて、こんなに愛おしい響きだったのかとポロポロと涙が出てきて、号泣しました。日常耳にしている音が、みんなにとってどれだけ大事なかがわかったんです。それもある、岩手県大槌町の防災無線の復旧は、すぐにお手伝えいまして、震災から2カ月後の5月には録音した音源をお渡ししました。以降、毎日正午に「ひよっこりひょうたん島」のメロディーが防災無線から流れているんですよ。

「失って初めてわかるものですが、普段は気がつかない日常を取り戻すって、本当にかげがえのないものなんです。」

小曾根 阪神・淡路大震災の時、僕は神戸のFM放送で番組を担当していたんですが、番組もコミーシャルも自粛になりました

た。宴会を放送しているわけではないし、僕は自粛の意味がわからなかった。普通にしていることも、あいう時には大事ではないかと思っただんです。

それでスポンサーとも話をして、1月17日の震災から1カ月半後の3月1日、いつもの日曜9時に番組を再開しました。番組冒頭のジングルが流れた直後から、FAXが止まりませんでした。「帰ってきたー！」「これが聞きたかった！」と。駅の



東北復興支援キャラバンツアー メンバー & スタッフ

アナウンスも、防災無線もしっかりです。どうやって皆さんに、日常の樂しかったことを普通に戻せるかということを考えます。音楽が少しでも心に栄養、エネルギーを入れてくれたらいいなあという思いだけで、いつも弾いています。

**常に自分自身が
前進し続けること**

小曽根 自分が一番向き合わないといけないところは、自分自身が前進し続けなければならないということです。僕自身が常にものを創り続けていないといけない。演奏に行くとか、何か活動するというのは、基本的には「アウトブット」なんです。でもアウトブットするためには、こもって自分で何かを創らなければならぬ時期があります。尊敬する井上ひさし先生は、シエイクスピアも話にならないほどの多くの戯曲を書かれました。これだけは日本人が風化させてはいけないと

いう、昭和のある時期のことを自分が死ぬまで書き続けると言って、最後は小林多喜二さんのことを書いて亡くなったのですが、その時の音楽を僕は担当させてもらいました。林芙美子さんのことを書いた作品に、「書き続けなきゃいけない」というセリフがあるんです。これはまさに井上先生自らの言葉だと思っんですが、それを聞いたときに僕も「ああ、書き続けなければ」と思いました。

自分がつくり続けていないと、やっぱりどこかで不安になる。これだけは裏切れないんです。もう30枚40枚アルバムを出して曲を書いてきたんですが、やっぱり二番煎じはダメなんです。新しい曲を書いていないという事実は、自分が一番わかる。自分でつくり続ける限りは、皆さんの心に届く音楽を奏でることができているのではないかと思っています。——生きるように仕事をしているという事です。

小曽根 そうですね。生きることそのものというか。

——音楽であれ何でもそうですが、その人がにじみでますから、ごまかせないですよ。

小曽根 自分をごまかせないんですね、僕は。ここが一番怖い。やるうと思えばうまく回すこともできると入っていますが、それはもう「こなし」に入ってしまったって、こなし始めてしまつと、パワーダウンする。演奏のテクニクも落ちるし、腹の底から出てこないといけないものが、ちょっと頭の方から出てきたり。そうなると、ここ（頭）が空になってきているということです。だから自分で書くしかないですね。

——常にそうやって自分を鼓舞しているんですね。

小曽根 誰か別の音楽家の即興を覚えて新しいレパートリーにしても、

それは僕の曲ではないんですよ。どんな大曲を弾いても心は埋まらない。演奏家として弾いたものであって、人間小曽根真が弾いたものではないんですね。自分の曲を弾いて、自分で満たしていかないと。

——その分、ご自分にものごく謙じていくんですね。

小曽根 10年前には弾けなかったプロ「フイエフ」という作曲家の「ピアノ協奏曲第3番」という大変な曲があるのですが、この10年間クラシックをやってきたことで弾けるようになりまして。でも、自分が「ピアノストとしていけるやん！」と思えるところに達しても、いろいろな方に「それはすごいね！」と褒めていただいても、やっぱり心は埋まらないんです。「ピアノストとしては確実にうまくなってる。でもそれは別だよな」と自分でもわかっているんですよ。

今、頭のなかの自分が「そろそろ次の新しい曲書きなさいよ」と言っ



てくるので、「わかってる、考えているからちよつと待って」と返事しています(笑)。

一人ひとりが意識を持って参加していい!

小曽根 日本フィランソロピー協会のミッションは「民主主義社会の実現」と伺っていますが、「みんなが考えよう」というところは、日本も本腰を入れないといけませんね。

— そうなんです、今こそ考えないと。若い人がソーシャルビジネスを始めたり、高学歴高収入の人がNPOに転職したり、少しは日本社会も変わってきたのかなとは思いま

す。彼らを潰さないように、彼らがいきる社会にしないと。

小曽根 見えない力に潰されるのは怖いですね。少なくとも、みんながもうちよつと政治に興味を持って、政治でなくても目の前の出来事に少しずつ意識をもって、そしてもうちよつと思いやりのある世の中になるのが、民主主義の基本だと思えます。

感情的に誰かを批判したり責めたりするのではなくて、一人ひとりが意識を持って参加していいこうと考える、それだけいいと思うんですね。みんなが興味を持たずに放棄してしまうと、勝手なことをされてしまう。

— そういう社会的な視点も発信していただけるのは、うれし

小曽根 僕は自分の好き嫌いはありますが、1つ、2つの物

差して人を批判したり批評するのは好きではありません。けれども、自分の意見を出していくのは、健全な、風通しのよい世の中をつくっていくことだと考えます。まずは「関わりましょう!」「興味を持って!」でいいと思うんです。

— 発信するとそれに対する反応も来るから、またお互い触発されたり化学変化が起きたり、そこがまたおもしろくて、ジャジーですよ。

小曽根 そう、まさにその瞬間が「call and response」、掛け合いですね。

— 今日元気が出る言葉をたくさんいただきました。今後のご活躍も楽しみにです。ありがとうございます!

インタビュー

公益社団法人日本フィランソロピー協会
理事長 高橋陽子

【2014年12月24日

KAJIMOTO事務所にて】

PROFILE 小曽根 真 (おぞね・まこと)

1983年パークリー音楽大学ジャズ作・編曲科を首席で卒業。同年米CBSと日本人初のレコード専属契約を結び、アルバム「OZONE」で全世界デビュー。2003年グラミー賞ノミネート。近年はクラシックにも取り組み、国内外の主要オーケストラと共演を重ね高い評価を得ている。2014年2月ニューヨーク・フィルのアジアツアーに初の日本人ジャズピアニストとして抜擢され、その後ニューヨークでの特別公演への出演が急遽決定。満員の聴衆に迎えられ、NYタイムズ紙をはじめ多くのメディアでその成功が絶賛された。また、自身のビッグバンドNo Name Horsesが結成10周年を迎え「Road」をリリース、全国ツアーを行った。平成25年度文部科学大臣賞を受賞。国立音楽大学教授。

公式サイト：www.makotoozone.com/